

令和 2 年度

小 論 文

10 : 00 ~ 11 : 30

学 校 教 育 学 科
(推 薦)

注 意 事 項

1. 合図があるまで、この冊子と解答用紙を開いてはいけません。
2. 合図があったら最初に、受験番号を解答用紙の指定の欄に記入しなさい。
3. この冊子と解答用紙について、印刷の不鮮明な箇所や、汚れの箇所を見いだした場合は、すみやかに申し出なさい。
4. 解答用紙は 2 枚配布しますが、1 枚だけ提出しなさい。残りの 1 枚は下書き用です。
5. 解答は縦書きで書きなさい。
6. この冊子と下書きに用いた解答用紙は、持ち帰ってください。

課題文を読んで、以下の設問に答えなさい。

課題文

教育現場で積極的に取り入れられている協働学習やアクティブラーニングを行うなかで、移転可能性(汎用性)の高いスキルを身に付けるためには、いったいどのような学びの姿勢が必要なのでしょう。

まずは、「自己効力感^アを高めることが大切になります。

自己効力感とは心理学の概念で、おおまかに説明するなら「自分には何かを成しとげる力があるとする考えや確信」のこと。この自己効力感を高めることが、自発的な学びをうながしていくとされているのです。

逆に次のような態度は、自己効力感が低い状態を表します。

「どうせ言っても分かってもらえない」

「自分は黙っていたほうが周囲のためだ」

「余計なことをして揉めるくらいなら、なにもしないほうがいい」

そこで、自分から意欲を持って勉強する「自発的な学び」を推進するためには、自己効力感を高めていくことが非常に重要です。自分が行ったことが結果に対していい影響を与えられるような、そんな経験を積むことがひとつのポイントになるからです。

自己効力感を高めるためには「具体的かつ重要性の高い課題」を解決した体験が有効だとする研究もあります。「具体的かつ重要性の高い課題」とは、達成条件が明確で、また自分だけでなくまわりの人たちにとっても重要性が高い課題のことです。

たとえばクラスの行事で1位を取るとか、親も期待している模試でA判定を取るといった、「大事な場面で結果を残せた」ととらえることができる体験なども大事になります。

子どもの自己効力感を高めるには、親や教師が学校の行事やテストなどの重要な場面に関心を払うことが有効に働くと思います。具体的な課題を設定し、それを乗り越えていく経験が年に2、3回用意されていると、それらを一つひとつ乗り越えていく過程で自己効力感が高まっていくのです。

課題学習のための協働学習は、答えのない問いに対して、暫定的な答えでいいので「これならなんとかなるかもしれない」という、いま出せる最良の答えを導き出すことなのです。そして、ほかの人の意見を得ながら、改善点を洗い出していく。もし改善点が見つからなければ、それは解決すべき優先度の低い課題を扱ったこととなります。優先度が高ければ高いほど多様な意見が集まり、次々と改善案が出るはずだからです。

このような、多様な意見を取り入れなければ解決策が見出せない課題には、やはり自己効力感が高くなければ取り組めません。なぜなら、つねに誰かから「そこは違う」「ここは直したほうがいい」と言われ続けるからです。

そんなときに、もし自己効力感が低ければ、「自分は不完全なものしか作れないんだ」となってしまう。でも、自己効力感が高ければ、「改善に向けた取り組みに参加できて楽しい」と思えるはずですよ。

協働学習には、誰も100点を取れないが誰も不合格にならないといういい特徴もあります。そして、このように自己効力感を高めながら、多様な意見を集約して解決策を提案するプロセスを経験することで、新たな領域や未経験分野への挑戦においても、自発的な学習成果を期待できるようになっていくのです。

協働学習について述べましたが、このような話をすると、もともとコミュニケーション能力に長けた「頭のいい人」たちの世界ではないかと思う人も少なからずいるようです。たとえば、ハンディキャップを持っていたり、生まれつき持病があったりする人にとっては、いくら協働だと言っても難しく見えてしまうこともあると思います。

そこにこそ協働の次なる課題があります。

あらかじめルールが決まっているスポーツなどとは違い、課題解決や課題自体は、必ずしも人を排除しません。ルール自体も自分たちで作れるし、別に成績優秀な人だけが集まっても、正しく効果的な解決策が生まれるとは限りません。

たとえば、アフリカの貧困を解決したい意識の高い学生がいるとしましょう。でも、どう考えてもアフリカに赴いて現地で生活する人の現実を理解していたり、その人たちの言葉を話せたりする人がチームにいないければ話にもなりません。相手の現実を理解するためには、「先行研究ではこうなっている」という決めつけこそがじゃまになることすらあります。こうしたことをひとつとつても分かるように、「頭のいい人」さえ集めれば課題が解決するわけではないのです。

それぞれが持ち寄った知識やスキルを活かすことで、これまでになかったアイデアを出すという意味では、むしろ立場の違う人や、既存の物差しではけっして評価されなかった人たちの存在こそが重要です。

そこで、僕はふだんから学生たちにこう伝えていきます。

「人の事情は尊重しよう」

人の事情は、基本的には変えられません。他人には踏み込めない部分があるのです。その前提で、協働していこうと伝えていきます。

ある人がなにかをできたり、できなかったりすることの背景には様々な事情があります。その事情の是非を、他者が判断する権利などありませんよね。他人の事情の良し悪しを決める発想自体が、従来行われてきた同一の基準に合わせる教育なのです。

そうではなく、それぞれの事情に踏み込まないけれども、なにかができないのならば、ほかになにができるのか、どうすればいい形になるのかについて知恵を出し合い、協力していく。そんな他者への配慮の仕方や自らの責任感を養うのに、協働学習はとてもいい機会になると思います。

いずれにせよ、協働学習は優秀な人や外向的な人だけが活躍する世界ではありません。

むしろ、そうではない人たちの力を活かせる集団のほうが、結果は確実に深いものとなるでしょう。

自己効力感についても、ハンディキャップや課題を抱えている人にとってこそ自己効力感が高まるような場面がもつと必要だし、そもそも誰だつてできないことはあるはず。そんなときに、「自分はこの集まりではどんな貢献ができるのだろうか」と考え、実際に人と協力し、^イ他者との違いのなかでできることがはじめて生まれてくるのです。

物差しはひとつではなく、むしろ自分なりの物差しでなにか人よりできることがあつたり、ある集団のなかで尊敬を得ることができたりする経験を積むことが大切です。そして、他者がそんな経験をするのを目にして、人を尊重することの意味を理解していく。

そのような新しい形の教育がいま求められているのです。

〔出典：鈴木謙介『未来を生きるスキル』（KADOKAWA、二〇一九年）より一部を改変して使用した。〕

設問一 傍線部アで、筆者は「自己効力感」を高めることが大切」と述べていますが、「自己効力感」を高めるとはどういうことですか。課題文に即して二〇〇字以内で説明しなさい。

設問二 傍線部イで、筆者は「他者との違いのなかでできることがはじめて生まれてくる」と述べていますが、これについて、あなたはどうか考えますか。課題文を踏まえながら、自分の体験や見聞をまじえて、六〇〇字以内で述べなさい。